

研究課題	オンラインでも五感で感じるオーストラリア姉妹校との生活文化の交流
副題	～家庭科「お茶をいれる」学習を活用した【体験型オンライン交流】の開発～
キーワード	小学校英語／家庭科／オンライン交流／教科横断的学習／異文化交流
学校/団体名	私立学校法人北陸学院 北陸学院小学校
所在地	〒920-1396 石川県金沢市三小牛町イ - 11
ホームページ	https://www.hokurikugakuin.ac.jp/primary/

1. 研究の背景

本校では、1961年から外国人講師による英語の授業を行ってきた。2022年度現在、全校児童（118名）を対象にネイティブと日本人の教員による Team Teaching で英語の授業を行っている。また、立石（2021）が「2017年度から多読教材 Oxford Reading Tree の英語絵本を約 100 冊取り入れた。」ことから、児童は学校でも家庭でもネイティブの発音をきく環境下にあると言える。

一方で、1990年に姉妹提携したオーストラリアのジブゲイト小学校とは、30年に渡り学校訪問やホームステイなどの対面交流を通し、互いの文化の独自性や多様性を理解する取り組みが行なわれてきた。ジブゲイト小学校では授業で日本語を学び、本校では英語を学んでいることから、互いの母国語を学ぶことが共通点となっている。また、ジブゲイト小学校とは対面交流に留まらず、2014年度から2020年度まで Skype によるビデオ通話を利用し、2021年度からビデオ会議アプリケーション Zoom によるオンライン交流を実施してきた。しかし、2020年度以降は、コロナ渦にあって対面交流ができないため、オンライン交流のみとなっている現状がある。オンライン交流は年間 12 回を計画実施しており、双方の担当者がメールで情報交換しながら活動内容を工夫してきた。例えば、「英語と日本語で自己紹介」やジブゲイト小学校教員からリクエストがあった「おりがみ」などを取り入れてきた。オンラインでも一緒にできる活動を意図的に取り入れてきたが、大半が画面を通した音と映像によるものであり、実際の交流とは大きく隔たることが課題である。

2. 研究の目的

本研究では、オンラインであっても『五感で感じる』ことができる【体験型オンライン交流】を教科横断的に開発することが目的である。

【体験型オンライン交流】の活動内容には『五感で感じる』という視点から、〔お茶をいれる〕を選定した。その理由として〔お茶〕は両校の共通の生活文化であることが挙げられる。ジブゲイト小学校では〔モーニングティー・アフタヌーンティー〕の時間が設けられ、休息したり会話したりしながら〔お茶〕を飲む習慣があった。日本でも〔お茶〕は身近な生活文化であり、小学校家庭科では「日本の伝統マーク」を付して第5学年の学習内容となっている。

【体験型オンライン交流】では、同じ道具や茶葉を用いて〔お茶〕いれて一緒に味わい『五感で感じる』ことによって、今までのオンライン交流とは異なった交流が期待される。

3. 研究方法

本研究では、【体験型オンライン交流】の開発に向け、家庭科と英語科の学習を教科横断的に計画・実践した（表1）。2022年度のオンライン交流は年間12回計画・実施した。

(1) 調査対象と調査時期

調査対象：北陸学院小学校6年生（18名）

調査時期：2022年4月～12月

(2) 調査方法

- ①家庭科・英語科の授業実践の検討
- ②児童への質問紙調査（全4回）と分析
- ③【体験型オンライン交流】のビデオカンファレンス

表1 【体験型オンライン交流】開発に向けての授業実践

時期	取り組み内容	評価のための記録
4月13日	・家庭科授業①<1年間一緒に研究していきましょう> ・「オンラインについて」の児童の実態把握	観察記録（児童） 質問紙調査1（児童）
4月27日	・家庭科授業②<なぜオンラインで五感なのか> 茶香炉と水だし緑茶で五感体験 ・「お茶の学習について」児童の実態把握	観察記録・写真（児童） 質問紙調査2（児童）
5月18日	・公開研究授業 家庭科授業③ <お茶のフルコースを五感で味わおう>	ビデオ・観察記録（児童） 授業評価（教員・大学生）
5月25日	・家庭科授業④<おいしいお茶のいれ方は> 茶道具カタログとお茶をいれる手順の写真・動画撮影 ・「お茶のフルコースについて」児童の実態把握	観察記録・写真（児童） 質問紙調査3（児童）
6月9日	・英語科授業①<英語科の先生にお茶をいれよう> 道具の名称や手順を英語で表現してみる。	観察記録・写真（児童）
6月16日	・英語科授業②<お茶をいれる手順を英語にすると>	観察記録・写真（児童）
6月23日	・英語科授業③ <茶道具の名称や手順を日本語と英語で書いてみよう> 茶道具のカタログづくりとお茶をいれる動画編集	観察記録・写真（児童） ビデオ記録（児童）
7月20日	・国際宅急便でオーストラリアへ茶道具を送る	掲示物で情報共有
9月15日	・英語科授業④ 【体験型オンライン交流】の役割分担と打ち合わせ	観察記録・写真（児童）
9月20日	・公開研究授業【体験型オンライン交流】の実践 ・【体験型オンライン交流】に関する児童の実態把握	ビデオ記録・逐語記録 質問紙調査4（児童）
11月17日	・【体験型オンライン交流】のビデオカンファレンス	参加者のコメント
12月6日	・オーストラリアから提案された【体験型オンライン交流】	ビデオ記録（児童）

4. 代表的な実践

(1) 「茶道具のカタログ」と「お茶をいれる手順の動画」を作成してオーストラリアに送ろう

オーストラリアに茶道具を送るため、茶道具のカタログやお茶をいれる手順の写真・動画撮影を iPad で作成することにした。

①茶道具のカタログづくり

急須・湯呑茶碗・茶葉・落雁などの写真撮影を行った。児童は、撮影した写真をその場で再生し、道具の並べ方や撮影角度などを工夫する姿がみられた（図1）。



図1 撮影写真を再生確認する

②お茶をいれる手順の写真撮影

お茶をいれる手順に沿って道具を準備し、写真撮影を行った。コマ送りのように動きを静止させて22枚の写真を撮影した。お茶をいれる手順の文章をみて、写真を再生確認する姿もみられた。

③お茶をいれる動画撮影

児童のアイデアで3台のiPadを使用して撮影が行われた。1回目の撮影動画を再生確認し、話し合った結果再び撮影することにした。2回目には、道具の位置に印をつけたり、道具を渡す役割をしたりと動画をみる人の立場になって撮影を工夫していた（図2）。



図2 iPad3台で動画撮影

④お茶をいれる手順を英語で表現する

英語科の教員にお茶を味わってもらうため、児童が日本語で手順を話しながらお茶をいれた。児童が「What's 急須 in English?」と問いかけ、道具の名称を英語で書く機会を持った。「少しずつ=little by little.」「8分目=80%full.」の表現に児童からは、「そう言うのか」と驚きの声があがっていた。英単語を並べて手順の英文を作成した。



図3 英語字幕を挿入

〔茶道具のカタログづくり〕では、日本語を学んでいるジブゲイト小学校に向け、漢字・ひらがな・ローマ字を書いた。更に、児童は産地の地図や使用している茶葉の部分絵を添えていた。〔お茶をいれる動画〕は、iMovieで編集し、英語字幕を挿入した。ここでは、1台目のiPadで動画再生して確認する、再生動画と手順の文章をみながらタイミングを知らせる、2台目のiPadで英語字幕を挿入する役割分担がみられた（図3）。

(2) お茶をいれる【体験型オンライン交流】の実践

【体験型オンライン交流】は、14名の児童で行った。机に茶道具を並べ、〔お茶をいれる〕手元が画面に映るようWebカメラを設定した（図4）。両校の画面が繋がった瞬間、本校児童は両手を大きく振りながら“Hello.”と何度も呼びかける姿がみられた。ジブゲイト小学校児童も、茶道具を並べた座卓を取り囲むように座り、両手を挙げて手を振る姿がみられた（図5）。



図4 お茶をいれながら会話する

茶道具を説明する場面では、「これが急須です」「This is Japanese teapot.」とカメラに向けると、

それをみたジブゲイト小学校児童が同じように急須を持ち上げてカメラに向ける姿がみられた。また、本校児童が作成した〔お茶のカタログ〕や〔手順の説明書〕を持ち上げてこちらにみせる仕草から、「みているよ」というサインを送っているように感じた。「急須の中に茶葉を大きじ1杯入れます」という場面では、ジブゲイト小学校の児童が茶葉の封を切った後、袋に顔を近づけて香りを嗅ぎ、袋を順番に渡しながらか全員が香りを試す姿がみられた。お茶をいれた後には、両校の児童で一緒にお茶を飲むことができた。お茶を飲みながら、「日本茶はおいしいですか」「Did you like the tea?」「落雁は好きですか」「Do you like rakugan?」と問いかけると、ハンドサインや大きく相槌する仕草で答えたり、空っぽになった湯呑茶碗をみせたりしていた。



図6 両校が交流している様子

5. 研究の成果

(1) オンラインに関する児童の実態把握

2021年3月より全校児童が1人1台の端末(Chromebook)を所持している。なかでも、オンラインの授業や交流経験が最も多い6年生にオンラインに関する質問紙調査を実施した。自由記述で得た回答は、類似カテゴリーに分類した(表2)。

オンラインの「メリット・デメリット」には、『見る・聞く』のコメントが多かったことから、オンラインで児童が『視覚・聴覚』を働かせていることが受け取れる。また、オンラインでできないことに「実技の授業・遊び・触れる」を挙げていることから、オンラインでは体を用いた活動が難しいということを児童が実感していると考えられる。オンラインでも『五感で感じる』ことができる活動導入の重要性は、教員だけでなく児童の実感からも受け取ることができた。

表2 オンラインに関する児童の実態

質問項目	類似カテゴリー(人数)
オンラインのメリット	移動しなくても良い(10) 登下校の時間がない(4) 見やすい(3)
オンラインのデメリット	見えにくい(5) 声が途切れる(5) 目が疲れる(3) 聞き取りにくい(2) 自由に話せない(2) 伝わりにくい(4) 視力の低下(1)
オンラインでできないこと	実技の授業(15) 遊び(6) 友だちとの関わり(4) 触れること(3)

(2) 【体験型オンライン交流】に関する児童の実態把握

【体験型オンライン交流】実施後行った参加児童14名への質問紙調査では、問1「オンライン交流と【体験型オンライン交流】では違いを感じましたか」に対し13名の児童が「違いを感じた」ことが明らかになった(表3)。問2「【体験型オンライン交流】で思ったことや気づいたことはありますか」の自由記述回答は、「お茶について」「伝える・伝わる」「一緒にする」「その他」のカテゴリーに分類することができた(表4)。「お茶について」の記述回答が多かったことから、【体験型オンライン交流】では〔お茶をいれる〕活動が印象に残ったと考えられる。また、「一緒に」という記述が多かったことから、共に活動することが楽しくおいしい時間に

なったことが推測できる。[お茶をいれる] ことを通し、「伝える・伝わる」という実感を得たことはもちろんのこと、相手の文化を知りたいという機会になったことがわかった。

(3) 【体験型オンライン交流】のビデオカンファレンス

【体験型オンライン交流】は、2 台の iPad を用いて、本校児童側とジブゲイト小学校側の動画撮影を行った。

ビデオ分析では、小林（2019）の「会話を逐語記録するプロトコル分析」と「ビデオを閲覧・ストップし評価を記述していくビデオアテネーション分析」の手法を実施した。また、佐伯（2018）が「実践のリフレクション」として提唱する「カンファレンス」を校長と家庭科・英語科担当者、筆者の 4 名で実施し、以下の 4 つの視点が挙げられた。

①環境構成について

【体験型オンライン交流】では、児童が座る場所やものの配置、テレビ画面や Web カメラの位置などが、交流に影響するということがわかった。ジブゲイト小学校では、茶道具を置いた座卓を囲むようにして座り、終始リラックスした表情で交流を楽しむ姿がみられた。それは、日本の文化を踏まえての環境構成だったと推測される。また、上部に設置された Web カメラで児童全体が常に画面に映し出され、表情や反応をよく受け取ることができた。活動内容よる環境構成の工夫が必要である。

②実施人数について

【体験型オンライン交流】では、本校児童 4 名がカメラの前に立ち、10 名のジブゲイト小学校児童に話しかけながらお茶をいれる試みとなった。

表 3 従来のオンライン交流との比較

選択項目	回答数
①違いを全く感じなかった	0
②少し違いを感じた	5
③違いを感じた	7
④違いをととてもよく感じた	1
⑤どちらとも言えない	1

表 4 児童が【体験型オンライン交流】で思ったこと・気づいたこと

<p>お茶について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しかった。もっとお茶を飲みたかった ・オーストラリアスタイルのお茶の交流もいつかやってみたい ・オーストラリアと日本のお茶の違い。お茶に牛乳や砂糖を入れるとどんな味がするのか想像つかなかった ・オーストラリアの生徒たちのお茶を飲んでの感想「おいしい」と言ってくれて日本のお茶を知ってくれてうれしかった ・もう少しお茶は苦手かなと思ったけど、みんな笑ってサムズアップしていてびっくりした
<p>伝える・伝わる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外の人と話すのが緊張した ・日本の文化を外国に伝えるのはいいと思った。 次は、外国の文化を教えてもらいたい。 ・場所がちがっても工夫して伝えることでやりたいことが伝わることがわかった。
<p>一緒にする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一緒に何か作ることが楽しかった ・国が違っていても一緒に同じことができるのは良いなと思いました ・ジブゲイトスクールの人たちと飲んだり食べたりする情報交換は、自分たちだけで食べるよりおいしく感じた
<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オーストラリアの遊びについて知りたい ・次はジブゲイトから教えてもらう ・マスクをしていないのがうらやましかった。

総勢 24 名がお茶を飲む場面では、会話しながら自然な応答が生まれた。しかし、大人数を画面に映すため、カメラと児童に距離ができ、画面越しの音が聞き取れないことが課題となった。

③画面について

オンライン交流での画面表示について、「相手の画面のみが映し出されていた方が対話しやすいのではないかと」や「両校の画面を同時に見ることで、一体感を得られる」という意見があった。交流の活動内容による画面表示の設定の検討が必要である。

④共有する文化について

今回の【体験型オンライン交流】では、[お茶]が共有する文化となった。[お茶]は両者にとって『同じ』生活文化であるが、[茶道具・茶葉・いれ方]が『ちがう』という側面が驚きやおもしろさにつながった。今後の【体験型オンライン交流】では、『同じとちがう』をテーマに各学年の活動内容を設定していくことで、オンライン交流が充実するのではないかと考える。

6. 今後の課題・展望

家庭科と英語科の教科横断的学習では、タブレット端末を活用した児童の主体的な姿が見受けられた。その具体的な点として、「①互いにアイデアを出し合って取り組む姿」「②情報共有しながら話し合う姿」「③質問紙調査における自由記述の回答量の多さ」「④授業前後で意見やアイデアを教員へ応答」の4点が挙げられる。しかし、両授業において常にタブレット端末を活用していたため、使用しなかった場合と比較できなかったことが課題となった。

ビデオカンファレンスでは、【体験型オンライン交流】の学習環境として「①環境構成の工夫」「②実施人数と画面表示」「③共有する文化の選定」の課題が挙げられた。今後は【体験型オンライン交流】の対象学年を広げ、活動内容における学習環境デザインを検討したい。

【体験型オンライン交流】後、ジブゲイト小学校から[オーストラリア伝統アートでブーメランづくり]の提案があり、オーストラリアから届いた材料で12月6日に交流できた。【体験型オンライン交流】によって両校が応答的につながったことは、今後の交流への影響が期待される。

7. おわりに

教科横断的学習による【体験型オンライン交流】では、両校児童が生活文化を体験し、おいしく楽しい時間を共有できた。更に、体験を通して知識・技能だけでなく、考えや気持ちまでもが「伝える・伝わる」という実感を得られたことが具体的な成果として挙げられる。今回の実践は、【体験型オンライン交流】の開発に向けて関わった児童と教員による協働的な学びであった。

8. 参考文献

- 立石喜美子 2021 英語絵本を読める喜びを学びにつなげる：多読教材を用いた小学校の英語教育の実践北陸学院大学北陸学院短期大学部研究紀要, 14, 197-203.
- 小林俊行 2019 授業分析手法の違いによる教師のウェアネスの比較 日本科学教育学会研究報告, 33, 35-40.
- 佐伯胖・刑部育子・苺宿俊文 2018 ビデオによるリフレクション入門 東京大学出版会